グローバル・フォーラム会報

THE GLOBAL FORUM OF JAPAN BULLETIN

# アフリカで存在感増す中国：変わる中国流の支援

遡ること約30年前の1993年、冷戦が終結し、国際社会のアフリカ支援に対する関心が薄れゆく中で、その重要性を論じた日本が、アフリカ開発に関するフォーラムとして立ち上げたのが、アフリカ開発会議(TICAD)である。それ以降、日本はTICADなどを通じて、「最後のフロンティア」たるアフリカ市場の潜在力を日本経済の成長につなげるべく、外交実績を積み上げてきた。

他方、技術革新による経済成長や人口増加の目覚ましいアフリカだが、紛争や貧困、気候変動など、依然として多くの課題に直面している。加えて、近年では、中国がインフラ整備に巨額の投資を行うなど各国が影響力を強めているのも事実である。

こうした中、当フォーラムの「アフリカ政策パネル」は、12月14日に、**第８回アフリカ政策パネル「中国のアフリカ政策の動向」**（オンライン形式）を開催した（写真）。

当日は、報告者に青山瑠妙早稲田大学教授／当フォーラム有識者メンバーをお迎えし、遠藤貢東京大学教授（本パネル主査）などを含めた総勢130名が一堂に会し、縦横に議論を交わした。

特に注目された青山教授の発言のみ次の通り。

**●青山瑠妙**：習近平政権に入ってから、「一帯一路」構想において、アフリカ諸国に対する大きな政策的変化があった。それは、2021年と2023年の「一帯一路」フォーラムにおいて、**習近平が「小さくて美しい (small and beautiful) 」原則を強調したことだ。**同宣言は、従来の道路や鉄道のインフラ建設を重視する政策から、国民生活に密着した小さくて美しい政策への転換を意味する。実際のところ、シルクロードの融資額と融資件数を見たところ、2018年を機に大きく減少している。中国国内の経済やコロナ政策などで、財政が厳しくなっているなかで、「小さくて美しい」という原則は極めて現実的な政策といえる。その意味では、**アフリカにおける中国のプレゼンスが今後大きく低下することはない。**

# アフリカにおけるジェンダーと開発

アフリカ国内では多くの女性や少女が、暴力や貧困のリスクや課題に直面し続けている。日本としては、これまでの経験等をアフリカのジェンダー平等や今後の開発に活かしつつ、「共に成長するパートナー」として、歩んでいく必要があるといえよう。

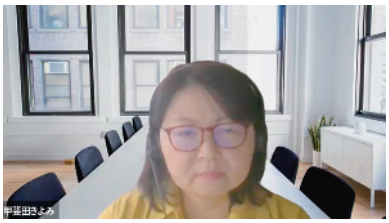
こうした中、当フォーラムの「アフリカ政策パネル」は、９月19日に、**第７回アフリカ政策パネル「アフリカにおけるジェンダーと開発」**（オンライン形式）を開催した。

当日は、外部講師に甲斐田きよみ文京学院大学准教授（写真）をお迎えし、遠藤貢東京大学教授（本パネル主査）はじめ本パネルメンバーなどを含めた総勢109名が一堂に会し、縦横に議論を交わした。

特に注目された甲斐田准教授の発言のみ次の通り。

**●甲斐田きよみ**：アフリカでは、女性の公的な進出が進む一方で、世帯の中でのジェンダー規範は根強い。妻は夫に従うべきであるという規範からは抜け出しにくいのが現状だ。今後、クオータ制によって活躍する女性が目に見えるようになることで、人々の意識は変わる。

他方、教育水準が上がり、初婚年齢が上がっても、結婚後の扱われ方は変わらない。**いくら高等教育を受けても、女性は子供を多く産むべき、夫に従うべきという強い規範にとらわれてしまう。**夫がいかにジェンダー規範を乗り越えるかにかかっているといえるのではないか。



# 議論百出から

グローバル・フォーラムのホームページ（http://www.gfj.jp）上のe-論壇「議論百出」への最近６ヶ月間の投稿論文を代表して、下記論文を紹介する。

## 弱まる覇権と分極化するアフリカ

グローバル・フォーラム有識者世話人／東京大学教授　遠藤　貢

アフリカでは21世紀に入り中国の存在感の高まりが指摘され、従来の資源開発を目的とした「アンゴラ型モデル」から、近年ではジブチの自由貿易区などにみられる経済特区の開設などを通じた貿易協力を推進する「泰達協力モデル」も登場した。また、中国・アフリカ協力フォーラム第８回閣僚会議でも示された人的交流の活発化もみられる。

一方、ロシアもまた、近年サミット級の会合を開催するほか、軍事、鉱物資源開発、原子力施設建設、メディアなどの領域での関係強化に動き出している。

こうした中露の動きを受けて、2022年８月には米国が「サハラ以南アフリカへのアフリカ戦略」と題した報告文書を現し、その中で中露に具体的に言及する形で、アフリカの不安定化につながりかねない状況への対応の必要性を議論している。また、2022年12月にはオバマ政権以来初となるアメリカ・アフリカ首脳会議を開催するなど、アフリカ諸国との関係の再構築に努めている。

しかし、こうした各国の動きは、旧宗主国の後退やマリでみられるような国連PKOの撤退などの動きと併せて考えると、現状アフリカにおいて「覇権」を行使できる国の存在は確認できず、それ故に、国連総会におけるロシアのウクライナへの軍事侵攻への一連の決議採択時に、アフリカの票が大きく分かれる結果にも反映したと考えられる。当面アフリカでは、様々な国の思惑が交錯し、極めて分極的な対応が現れてくる地域になることが予想される。　（2023年12月21日付投稿）

### 最近６ヶ月間で注目されたその他の論文

12/28　「ウクライナ、パレスチナに続き、ベネズエラも、世界の二分化が進む」（宇田川敬介）

11/30　「話題にならなくなったウクライナ問題」（岡本裕明）

10/２　「ナゴルノ・カラバフにおける新展開（研究会報告後の動き）」（廣瀬陽子）

９/７　「デマと集団心理の怖さ」（船田元）

８/２　「反乱したプリゴジンの命運は？」（舛添要一）

７/20　「動きだした鬼門の対中外交」（鈴木美勝）

７/18　「バイデン再選に危険信号」（赤峰和彦）

## グローバル・フォーラム活動日誌（７－12月）

７月１日、９月１日、11月１日　『メルマガ・グローバル・フォーラム』発行

８月１日、10月1日、12月1日、『GFJ-E-Letter』発行

９月19日　第７回「アフリカ政策パネル」（甲斐田きよみ氏他108名）

10月６日　第357回国際政経懇話会（堀本武功氏他17名）

12月５日　デニス・ベルダコフ・キルギス大統領府付属国立戦略研究所顧問による高畑洋平GFJ世話人事務局長への表敬訪問

12月14日　第８回「アフリカ政策パネル」（青山瑠妙氏他129名）

## 大国化するインドと今後の日印関係

第357回国際政経懇話会は、10月６日に国際政治学者の堀本武功氏（写真）を講師に迎え、標題のテーマについて、次のような講話を聴いた。

インド外交はモディ政権で大きく変わった。実利を優先するプラグマティズムと、国家間関係を上下関係として捉えるカースト観に基づく外交を展開している。現在、世界は欧米中心の時代からインド太平洋の時代へと変わりつつある。インド・中国が大国として台頭し、また、ロシアによるウクライナ侵攻などが起きる現代において、20世紀のような感覚でインドを見てはならない。今後、インドとの関係で日本に求められるのは、実利を重視し、センチメンタリズムを排除した「言うべきことを言う」姿勢である。

## デニス・ベルダコフ氏による表敬訪問

さる12月5日、高畑洋平GFJ世話人事務局長は デニス・ベルダコフ・キルギス大統領府付属国立戦略研究所顧問による表敬訪問を受けた（写真）。

同会談では、日本とキルギスのシンクタンク交流の拡大をはじめ、日本の中央アジアを含めたユーラシア外交の現状や課題等について意見交換を行うとともに、今後も双方の交流を進めていくことを確認した。

グローバル・フォーラム会報
2024年2月1日号(通巻第93号)

発行日　2024年２月１日
発行人　渡　辺　ま　ゆ
編集人　高　畑　洋　平

発行所　グ　ロ　ー　バ　ル　・　フ　ォ　ー　ラ　ム
〒107-0052　東　京　都　港　区　赤　坂　2-17-12-1301
［Tel］03-3584-2193［E-mail］gfj@gfj.jp
［Fax］03-3505-4406［URL］　http://www.gfj.jp/